

# よろずは

平成二七年

九月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

ももしきの

大宮人の

退り出て

遊ぶ今夜の

月の清けさ

万葉集 卷七―一〇七六 作者未詳

【意訳】

ももしきの大宮人が宮中から退出して歎を尽くす  
今夜の月が、清らかなことだ。

月を愛でる風習

今年の「中秋の名月」（十五夜）は、九月二十七日にあたります。旧暦では七月〜九月を「秋」と定めており、ちょうど真ん中にあたるのが「八月十五日」であることから「中秋」とされました。

旧暦（太陰太陽暦）とは、明治五年（一八七二）まで使用されていた、月の満ち欠けを主な基準とした暦のことです。新月の日を月の始まり（月立ち一日）とし、満月の十五日をピークに再び新月に戻る、という月の満ち欠けの一サイクルを一月としました。一月は二十九日か三十日、一年は三百五十四日になる計算で、五年に二度ほど閏月をもうけて地球の自転周期にあわせて調整する必要がありました。

少なくとも江戸時代中頃の文献には、月にお供え物をする現代の「お月見」に通じる風習が登場しますが、古くはただ月を観る風雅な集いだったといわれます。この歌に詠まれているのが「中秋の名月」かどうかはわかりませんが、古代の宮廷人たちも月を見て愛でていたようです。【万葉古代学係】